

「傷付けば痛む人」

毎年、いよいよこの季節が来たか、と思います。キリスト者にならなければ、ただ忙しいだけの、この年度末。でも、キリスト者になったからには、もう見過ごせないイエス様の十字架のことを思います。キリスト者になったことを後悔なんてしませんが、でも、イエス様の苦しみを見せ付けられる瞬間に、ちょっとずつ近づいていく感覚は、もちろん心地良くはありません。

どれくらいの生々しさ、具体性をもって、その十字架の出来事を思い起こすのかは、多分、個人差があるかと思います。映画のように写実的かつ劇的にその出来事を思い起こす人もいれば、もっと思想的に哲学的にその出来事を解釈する人もいるでしょう。また、その出来事を受け止めることで、どんな風に行動するかも、人によって異なると思います。この受難節の間は、好きなものを我慢するとか、お酒を断つという人もいますし、教会によっては特別な献金を行うところもあります。多分、どの理解も、どの受け止め方も、どの行動も、そこに信仰があれば正しいのだと思います。やっぱり、重要なのは、イエス様の十字架、イエス様が私たちのために命を献げられたという事実を信じるるところから始まる言葉であり、行いですよ。すでに与えられている誰かの考え方や、誰かのやり方を尊重しつつ、でも、ちょっと「イエス様が十字架にかかったってどういうことだろう？」という超入門的なところから想像力を膨らませてみたいと思います。

さて、新約聖書が伝えるイエス様の福音の、枠組み、骨子、基本的な部分を備えているのが、四福音書中、最も古いマルコによる福音書だと解釈して差し支えないでしょう。そんな超基本的なマルコによる福音書の第 1 章 12～15 節までを今日は読んで参ります。

まず、12 節から 13 節にある、イエス様がサタンから誘惑を受けるという箇所。サタンと言うの

は悪魔のことですが、ここでは別に神秘的な存在を想像する必要はありません。荒れ野に40日間も留まれば、様々な欲求や誘惑に襲われることは不思議ではありません。お腹が空いた、喉が渴いた、寂しい、人に会いたい、寒い、暑い、柔らかな布団で眠りたい、などなど。イエス様は、そういう誘惑を受けたということですね。野獣と一緒にいた、ということも、特別な状況ではなく、この冬における熊の問題を重ねるなら、とても現実的な状況かと言えます。もちろん、野獣の種類は、現代の日本と当時のイスラエルでは違いますが、とても危険で心許ない状況に身を置いていた、ということなのです。

ところで、なんでイエス様は、そんな危険な状況に身を置いていたのか、という疑問はあります。

「霊はイエスを荒れ野に送り出した」と聖書には書かれていますが、正直、この説明だけでは納得しにくいでしょう。私は、こんな風に考えます。「イエス様は、その最初から誘惑や苦難を知る人であることを確認する必要があった」と。つまり、イエス様は、御自分が誘惑を知ることができ、そこに伴う苦しみや痛みや葛藤を味わえることを、自ら確かめることを願われた、ということなのです。それは、もちろん神様の御心でありました。神様がイエス様に霊を送り、イエス様はその御心を理解し、自らの足で荒れ野へと赴かれた。神様の御子として、苦しみも痛みも関係のない生き方もできたでしょう。しかし、イエス様は、とても積極的に、私たちの価値観からすれば愚かしい程に、私たちに近づこうと、低いところに降りてきてくださったのです。私たちが何に苦しみ、何に痛みを感じ、何を切望し、何にイラ立ちを憶えるのか。そうしたことを理解したくて、知りたくて、イエス様は、わざわざ誘惑を受けるといって40日間を過ごされたのだと私は思っています。そして、そのイエス様の目的は叶えられたんですね。さらっと書かれているので、気にも留まらないかも知れませんが、「サタンからの誘惑」「悪魔からの誘惑」という表現が用いられるほどの、精神的かつ肉体的葛藤って相当なものだと言えます。

だから、まず、私たちが、この聖書の証言から受け止めるべきは、「イエス様は、福音書の第1章に書かれている段階から、すでに痛みも、苦しみも、葛藤も理解されていた」ということです。この捉え方は、この後続くマルコによる福音書を読むにしても、その他の福音書を読むにしても、決定的な意味を持っています。どういうかと言うと、イエス様は、宣教活動を開始されてから、十字架架上で死なれるまで、私たちと同じ感覚をずっと保っていた、ということです。長い距離を歩けば足も痛んだでしょう。もう歩きたくないと思われたかも知れない。12人の弟子たちと食糧を分け合えば食べ足りず空腹を我慢されることもあったでしょう。もう一口食べたいと思ったかも知れない。行った先々の街で拒絶されれば腹も立ったでしょう、悲しみもしたでしょう。愚痴の一つでも言いたい気持ちになったかも知れない。大群衆に追い掛けられたら疲れも憶えただろうし、もしかしたら、鬱陶しいという感情さえ味わわれたのかも知れません。そういう苦難と誘惑と葛藤を、人並みに、私たちと同じように感じられた先で、最終的に、主の十字架という出来事が起こる、ということなのです。

イエス様の御苦しみとは、福音書の終盤から始まるユダの裏切りや逮捕の出来事から始まるのではありません。神様の御子としてお生まれになったにも関わらず、本来持つべき謂われなどない優しい感受性と人としての痛覚をもって、その宣教の御業を始められた時から、ずっと御苦しみは続いていたのだと言えます。私たちが苦しいと思うことを苦しいと思い、私たちが痛いと感じることを痛いと感じる、そんなイエス様が、最後、十字架で死んだ。そこまで考えを深めて、想いを及ぼせて、私たちは、このイエス様の御苦しみ、イエス様の御受難の出来事を受け止めていたいと思います。

イエス様が、その最初から自らの御受難を覚悟されて歩まれたとすれば、15節にある御言葉の重みも変わってきます。「時は満ち、神の国は近づいた」とイエス様は仰いました。それは、御自分

の心と身体に感じた苦痛によって思い起こされた時間感覚だったのかも知れません。いよいよ救いの御業が始まった、もう救いは遠くないという福音。しかし、それは同時に、イエス様にとっては最終的に十字架という終結を見る、痛みと苦しみが増し加えられていく日々の始まりだったのでしよう。そのような日々の中で、でも、イエス様は柔和を示された、私たちが癒されたり、励まされたりする沢山の御言葉を語り残してくださった。それは、本当に素晴らしいことであり、イエス様の偉大なところですね。自分の人生の最後を、痛みと共に見据えながら、なお他者に優しくあること。ここにも私たちの、なかなか届くことは難しいけれど、確かな理想像があるように思います。

私たちは「傷付けば痛む人」イエス様が、その生涯と命を懸けて与えてくださった御言葉と恵みの中を生きています。それは、輝かしい神話やご立派な昔話ではなく、血が通い、痛みを抱えた、手触りのある福音です。今日からしばらくイエス様の御受難に関わる聖書のお話にお話を傾けていくこととなります。それは、ちょっとしんどいことかも知れませんが、イエス様の御受難を絵空事にしないように、私たちの隣人であるイエス様をいつも近くに感じられるように、しっかりと受け止めていきたいと思えます。

綺麗事じゃなく、御利益じゃなく。今日から始まる1週間も想像力と感謝を忘れずに歩もうとする私たちの上に、神様の御守りと、私たちの想いを超えた喜びがありますように。そして、イースターを心待ちにしながら祈る日々を送ることができますように。心から願うものであります。お祈りを致します。

神様。私たちは今、年に一度巡り来る受難節の日々を過ごしています。キリスト者なればこそ、この重々しい日々を、しかし、あなたの深い御心とイエス様の全き犠牲に感謝しつつ歩むことができますように導いてください。私たちの今までに犯した失敗も、これから犯すであろう過ちも、すべてを背負って十字架につかれたイエス様のことを心に留めつつ、赦され、新たにされた一人とし

て力強く明日への一步を踏み出すことができますように。主の十字架を前に塞ぎ込むではなく、その本当の意味を知って、自分を愛し、他者を愛することのできる福音を宣べ伝えることができますように。私たちの一人一人のことを支え、また十分に用いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

3月召天者を憶える祈り 聖書：ヨハネの黙示録7章13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

羽根一夫兄 はね かずお けい (1972年3月1日召天)
関谷正夫兄 せきや まさお けい (2020年3月3日召天)
村重隆一兄 むらしげ りゅういち けい (2016年3月4日召天)
牧野よし姉 まきの よし し (1949年3月10日召天)
高木はるゑ姉 たかぎ はるえ し (2020年3月11日召天)
畑 禎子姉 はた ていこ し (2017年3月15日召天)
皆川ふみ姉 みながわ ふみ し (2016年3月16日召天)
中野 操姉 なかの みさお し (1995年3月19日召天)
平岡重太郎兄 ひらおか じゅうたろう けい (1955年3月21日召天)
寺島すゑ姉 てらしま すえ し (1974年3月24日召天)

神様。とくに今年は大雪に見舞われた、この2月の終わり。私たちは来る3月にあなたの御下へと召された信仰の先達を憶えて祈りを捧げています。1年の一巡りの中に、あなたは春夏秋冬を定められたように、人の一生にも様々な季節を定められました。順風の時、逆風の時、幸せな時、不幸な時、喜びの時、悲しみの時。今、名前を読み上げ心に留めている3月の召天者の方々も、そんな色鮮やかな人生を全うされ、走り終え、あなたの御下へと旅立たれました。どうか、先に召されし敬愛すべき兄弟姉妹の、その人生に備えられた喜怒哀楽を、あなたが御心に納め、そして、その生き様に相応しい豊かな平安と祝福とで、この方々の魂を満たしてください。そして、未だ地上での歩みを続ける私たち一人一人に十分な励ましと、進むべき道標をお与えください。天にあっても、地にあっても、あなたと共なる恵みに与ることができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。